

けんせつ小町フォーラム二〇二六開催

けんせつ小町委員会は、去る三月六日、品川インターシティホールにおいて「けんせつ小町フォーラム二〇二六」を開催した。今回は、第一部が元プロ野球選手で実業家の齋藤佑樹氏によるトーク形式の基調講演、第二部は女性の活躍を最前線で紹介する三社による取組み事例紹介とパネルディスカッションの二部構成。

けんせつ小町チームによる事例紹介

第二部では、三社がそれぞれ「現場」「支店」「本社」の三つの軸から取組み事例を紹介した。

（株）竹中工務店の「&DO隊（アンダーワール）」からは、会場の則武さん・大泉さんに加えリモートで本間さんが登壇。「現場」の取組みとして「年齢・性別・職歴にとらわれず、誰もが働きやすい職場環境」を目指し、建設業未経験のスタッフや遠隔地からの業務支援などを積極的に取り入れた事例を紹介。大泉さんは、「女性技術者の平均勤続年数七年」という現実と向き合い、施工管理以外でも戦力になれる働き方を模索したこと、本間さんは山形県で農業に従事し、育児や介護も経験しながら現場をサポートしていることなどを発表。また「経験の

少ないスタッフを教育することは、コストではなく組織を強くするための「投資」という考え方についても述べた。

戸田建設（株）名古屋支店の「戸田人TODANCHU（とだんちゅ）」チームからは石原さん・佐藤さんが登壇し、「女性が現場で働くのが当たり前になり、性別に関係なく個性

を發揮する」というチーム名に込めた想いや、土木・建築を含め支店内の横断的な集まりによって幅広く活動したことを紹介。その活動は、オリジナルキャラクターを通じたPRをはじめ支店交流会、現場見学会、勉強会、HPでの発信やブランディング、ワーキングママの座談会などバラエティに富んでおり、建設業の魅力を伝えるだけでなく自分たちの視野を広げ、仕事を見つめ直す機会にもなったことを強調した。



斎藤佑樹氏
(元プロ野球選手・実業家)

「うまくいかないことがあってもリフレーミングで視点を変えることができる」と建設業にエールを送った。



竹中工務店の則武さん(左)、大泉さん(右)、本間さん(リモート)



戸田建設の石原さん(左)、佐藤さん(右)

（株）長谷工コーポレーションからは

本社人事部D&I推進室の掛橋さんが登壇し、グループ全体のダイバーシティ施策を担当する立場から、同社が二〇一六年以前から女性活躍推進に注力してきたこと、二〇一八年には部長格以上の女性職員が参加する「女性活躍推進PJ（幹部編）」を実施し、女性職員の声を基に考えた施策を経営トップに提案したことなど、ハード・ソフト両面での取組みについて語った。またこうした活動の成果として営業職・施工管理職ともに女性の比率が大幅に増えた一方、性別による役割の分業意識がまだまだ根深いなど、課題が多

く残っていることも付け加えた。

パネルディスカッション

三社による事例紹介の後、六名のプレゼンターと、第一部から司会を務めた新保さんが再度登壇し、けんせつ小町委員会・活躍支援専門部会の黒嶋敦子専門部会長を進行役として、それぞれの活動内容についてパネルディスカッション形式で更に深い議論を展開。各社の多様な取組みについて語り合った。

竹中工務店の則武さんは「職員の業務内容を広げることが、技術者としてのスキルアップだけでなく今後の働き方の自由度を高めることにつながる」、大泉さんは「自分のできることが増えると自信が付き、ライフステージの変化にどう対応していくかという展望の解像度も上がる」、また本間さんは「農繁期・農閑期に合わせて働き方を調整してもらえるのは本当にありがたい」と述べた。

戸田建設の石原さんは、支店としての活動のメリットとして「人数が多くなる立場の人が参加してくれたので、横のつながりが広が

た」、佐藤さんは特に印象に残った活動としてワーキングママ座談会を挙げ、「協力会社も含めた様々な年齢・ポジションの女性から産休・育休について生の声を聴くことができる貴重な場になった」と振り返った。

長谷工コーポレーションの掛橋さんは、同社が早くから女性活躍に取り組んでいることについて「マンション建設を主業としているため、『住まいと暮らしを提供する』観点から女性の視点を重視するという経営方針があった」と説明した。

最後に、黒嶋専門部会長が「日建連では、これからも全国の小町チームの日々の活動をHPなどで発信、応援していく。未来に希望を持ち、『ちやくちやく』と歩んでいきたい」と話し、「けんせつ小町フォーラム二〇二六」を締めくくった。



長谷工コーポレーションの掛橋さん



パネルディスカッションの様子



司会の新保さん(左)、黒嶋専門部会長(右)

下記二次元コードより、第2部のアーカイブがご覧いただけます。

